

## 第六章 サウジアラビアの秘かな動き

基地のモスクで金曜の夜明けの礼拝を済ませた司令官トルキ王子は近くの荒野で鷹狩を楽しんでいた。ハファル・アル・バテン基地はイラクとの国境近く、ネフド砂漠の北端に位置している。砂漠の荒野にも野兔や渡り鳥など鷹の獲物は多い。鷹狩はトルキ王子のようなサウド家の王族たちのたしなみでもある。

夏の盛りとは言え早朝の砂漠はひんやりと風も心地よい。2003年にイラクのフセイン大統領が失脚するまで、この空軍基地は北の守りとして緊張した日々の連続であった。しかし解放後にイラク国内の混乱が始まってからは、国境の守りはイスラムゲリラ、アル・カイダの侵入を防ぐことや、酒・麻薬などの密輸業者を摘発することが主な仕事になった。それは国境警備隊、地上パトロール隊の仕事であり、空軍の出番は全くない。そのためトルキ司令官の鷹狩りは暇つぶしと言う訳である。つい今し方までは……。

突然王子の白くゆったりした民族衣装の右のポケットからコーランの一節が流れ出した。携帯電話の呼び出し音だ。左のポケットにはもう一台普通の携帯電話があるが、今鳴り出したのは国軍幹部専用の携帯電話である。軍幹部と言ってもここサウジ章アラビアでは大臣以下殆どがサウド家の王子で占められている。しかも彼らは一族の中で特に血のつながりが濃い王子たちである。例えば国防大臣がトルキ司令官の父

親であるように。

「ああ、父上、何かあったのですか？」王子は育ちの良さそのままの明るく屈託のない声で電話に答えた。電話の相手が国防大臣と知った部下達の顔に一瞬緊張が走る。国防大臣は初代国王の十五番目の息子であり、また先代国王の実弟でもある。初代国王は多数の王妃を娶り三十数人の息子をもうけたが、彼の死後はその息子達がほぼ年齢順に王位を継承している。国防大臣の母親はトルキ王子の父親を含め七人の息子を生んだが、彼ら七人兄弟は結束を固め他の異母兄弟と張り合ってきた。特に長兄が国王として長期政権を維持する過程で弟達を政府の要職に引き上げた結果、彼ら七人兄弟はサウド家の中で確固たる地位を築き上げたのである。

「前置き抜きで用件だけ手短に話す。」父親の声がいつもより重々しい。

「先日ワシントンから申し入れがあった。今日から三日後の月曜日早朝、イスラエル戦闘機三機がイランに向かって我が王国とイラクの国境線上空を飛行するそうだ。」

イスラエルがイランの核施設を攻撃すると言う噂が世界中のマスコミをにぎわせており、トルキ王子はこれまで半信半疑であった。それがついに現実のものとして彼の前に突きつけられ、彼は緊張した。

## 第6章

「彼らはナタンズを狙っている。米国政府はイスラエルの攻撃を認め、我が国に対

して三機の飛行を黙認しろ、と言ってきた。」

国防相は息子の動揺を無視するかのように電話の向こうで淡々と話し続けた。

「それで我々にどうしろと言うのですか？」

「国王、内務大臣、外務大臣と俺の四人で話し合った。」

国王は国防相と二つ違いの異母兄であり、内相は国防相の実の弟である。そして外務大臣はこれも異母兄である故第三代国王の遺児、つまり甥ということになる。国防相、内相、外相はいずれも三十年以上も同じポストにおり、サウジアラビアの防衛と治安と外交を握っている。それはとりもなおさずサウド王家一族の体制を守ることもあった。

「我々は米国の要請を受け入れることにした。三機は夜明けごろお前の基地の北方を通過するはずだ。そいつらは黙って見過ごせ。」

「イスラエル機が我が領空を侵犯するかもしれないと言うのにそれを見過ごせと言うのですか？ どうして撃墜しないのですか？」トルキ王子は高ぶる気持ちを抑えきれずに父親に問い返した。

彼の肩に止まっていた愛鷹「ナーセル号」が思いがけない主人の大声に驚いて羽をばたつかせた。王子は自分の鷹に父親の名前をつけていた。これは敬意の意味合いと同時に、日頃頭の上がない父親に対する彼一流の茶目っ気の意味もあった。「ナー

セル号」が獲物を取り逃がした時など「ナーセルの役立たずめ！」とか「このろくでなし！」などと罵詈雑言を浴びせては溜飲を下げるのであった。

「息子よ。よく考えてみる。イランの核兵器開発は我々にとっても重大な脅威である。何よりもペルシヤ人でシーア派の坊主共は米国やヨーロッパ諸国或いはイスラエルよりも我々にとってもっと身近な敵なのだ。」

「その敵をイスラエルがやっつけると言うのだ。イスラエルのやりたいようにやらせておけ。それで我々の頭痛の種が一つ減る訳だ。ユダヤ人とペルシヤ人のいがみ合いで、我々アラブ人が勞せずして漁夫の利を得られるという寸法だ。」

受話器から国防相の薄ら笑いが漏れてきた。小さい頃から聞き慣れたその薄ら笑いをトルキ王子は今でも好きになれない。父親は自分の今の年ごろには既に国防相になっていた。そして彼は権謀術策の限りを尽くして今日までその地位を守ってきた。彼は権力の階段を一段昇る毎に今日のような薄ら笑いを見せたのである。

対照的に息子のトルキは『銀のスプーンを口にくわえて』生まれ、快活で裏表のない性格に育った。彼の周りには常に友人達との笑い声が絶えなかった。彼が軍のエリートコースであるジェットパイロットの訓練生として米国に留学した時も、彼の竹を章割ったような性格は米国人の上官や同僚達に好かれた。米国の軍人は陽気で快活で裏表のない人間が大好きなのである。

しかも彼らはエスタブリッシュメントと呼ばれる人物に秘かな憧れを持っており、「王子」などと言う米国には逆立ちしても探せないハイソサエティと仲間になれることがうれいのである。王子は「同じ釜の飯を食った仲間」に加えられ、彼らとの付き合いは今も続いている。

父親に息子の気持など解かるはずもなく、国防相は話を続けた。

「ワシントンはイスラエルのもう一つの要請を伝えてきた。これから後はお前と部下達の仕事だ。」そう言っつて国防相は息子のトルキに何事かを指示した。司令官の顔がたちまち紅潮した。

「了解。父上。」

彼はそう言っつて携帯電話を切ると周囲に集まった部下達に命令した。

「鷹狩りは中止だ。直ちに基地に帰る。主だったものを私の部屋に集めろ。今から三十分後に重要会議を開く。」